

2023年5月7日 説教「自分の日を正しく数える」

詩篇 90 篇 1-12 節

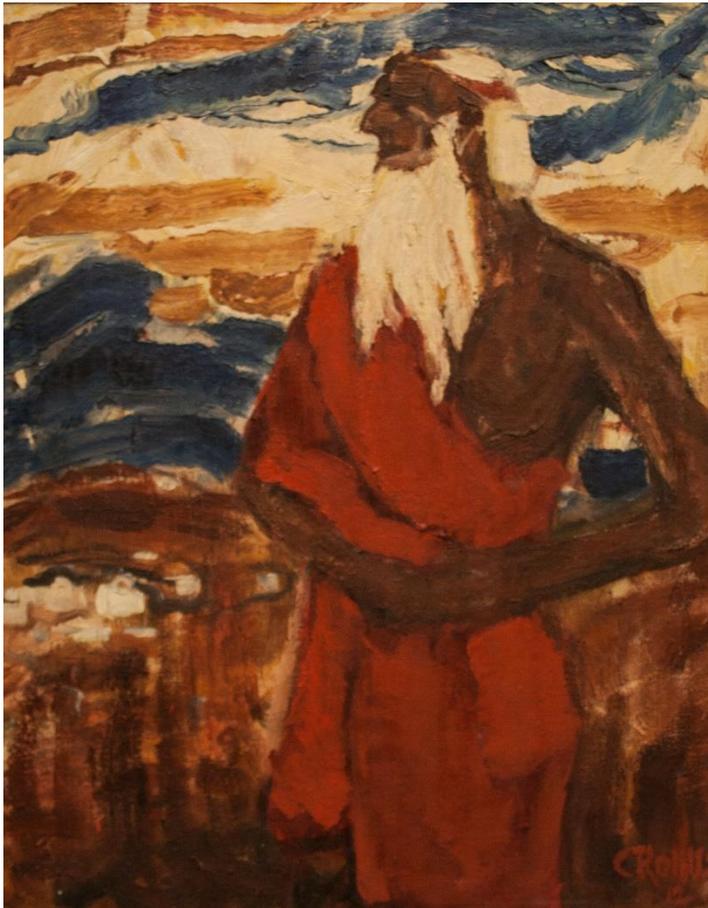
今朝は詩篇 90 篇。モーセの記した詩篇です。ダビデの時代が紀元前 1000 年ほど。モーセの時代はそれより 450 年も前のことです。モーセは、イスラエルの民のエジプト脱出の指導者で、十戒を根幹とする律法もモーセを通して与えられました。

1. とこしえの神 (1-4 節)

- ①主はすまい(1)「**主よ。あなたは世々にわたって私たちのすまいです。**」
主がすまいというのはどういうことでしょうか。魂の住み家と言っても良いでしょう。そこはもっぱら生きる場所であり、安らぎが備えられているのです。
- ②創造主 (2)「**山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまであなたは神です。**」
神なる方はそびえる山々はもちろん、天地のすべてが創造される前から神です。創造主です。
- ③千年も昨日のよう (3~4) **あなたは人をちりに帰らせて言われます。『人の子らよ。帰れ。』まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようなのです。**
ここにモーセの人生観が示されています。つまり、彼は千年という年月も一日が過ぎるようなもので、夜回りが巡回するひとときのようなだと告白するのです。

2. 自分の齢 (5~9 節)

- ①移ろう草 (5~6)「**あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。**」
人の地上の命は、主が押し出されると眠りに入るようなのです。それはちょうど、あちらこちらに育っている草花のようなのです。朝に花を咲かせたかと思うと、その日の夕べにはしおれていき、そして枯れていくのと似ているというのです。
- ②御怒りによって (7~8)「**まことに、私たちはあなたの御怒りによって消え失せ、あなたの激しい憤りにおじ感います。あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。**」
神の前に不義を重ねる人間は、主なる神の御怒りをうけ、消え失せることとなります。主なる神は、私たち人間の不義を御前に明らかにされ、隠されている秘密の不義を光のもとにさらされるのです。
- ③一息のように (9)「**まことに、私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢を一息のように終わらせます。**」



私たちはその不義のゆえに、主の御怒りのなかに沈んでいきます。そして、自分の齡、人生をまるで一息のように終わらせるといいます。ここの主の御怒りは、主の大いなる愛が隠れています。ここにもモーセの人生観があります。

3. 健やかであっても八十年 (10~12 節)

①飛び去る齡 (10)「**私たちの齡は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。**」

モーセの命についての告白が続きます。「私たちの齡は七十年、健やかであっても八十年。」。寿命がいささか延びたとしても、この年齢については、老年を現わすものであると言えます。それまでの間の誇りがあったとしても、それらは結局労苦とわざわいだと。伝道者の書の語り告げることにも相通ずることもあります。ともかくも、その人生はあっという間に飛び去っていくというのです。もっともモーセは 120 年の長寿を全うしたのですが。

②御怒りの力 (11)「**だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。それにふさわしく。**」

主の御怒りの力については誰もわかっていません。主が怒っておられるところはさらに深いところにあるのです。

③自分の日 (12)「**それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。**」

「自分の日」とは何でしょう。「日」を命とも、時間ともとることができましょう。また「残りの日々」と聖書協会共同訳は訳しています。それでは「正しく数える」とは何でしょう。結論において、これを考えていきましょう。

《結論》

実を言えば、今朝の聖書箇所は 11 年前に、私が大腸の上行結腸癌で手術を受けた後に、与えられた聖書箇所なのです。その時に、「**それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。**」という 12 節の御言葉に格別に覚えさせられました。ところが、時の推移とともに、この御言葉を覚えることが乏しくなっていってしまいました。今、新たな病を得て、改めて、この詩篇の一節についてより深い意識をもって歩んでいきたいと願わされています。11 年前と客観的に異なることがあります。それは、**私たちの齡は七十年**とある点です。私自身がその年齢に既に達しているということです。一息のようだと言われていますが、自分の日について正しく数えることについて考えていきたいと思えます。

この箇所をマタイの福音書 6 章 25 節から 34 節の視点から考えてみましょう。「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」と思い煩う者たちに対してイエスは語られています。

三つのポイントで見に行きましょう。

第一に、主は空の鳥と野の花をごらんくださいと述べられています。自分の日を正しく数えるために、まずはそのようにしなさいと読んでも良いと思われます。つまり、自分の日を正しく数えるための、第一歩は主なる神の大いなる恵みに目を止めるということです。目の前の雀が、働きもせずに元気に生かされている姿をながめていると励まされます。また、野に咲く花の美しさは、その色も形もソロモンが着飾った王服よりも美しいでしょうと言われます。虚心坦懐に自然恩恵である空の鳥や野の花を通して、神の恵みをたっぷり味わうことが、自分の日を数える第一歩です。

第二に、現実生活を過ごしている私たちは、やはり何を食べるか、飲むか、着るかとういこうことを思いめぐらしている存在です。もちろん、それは生活全般のことです。経済、仕事、家族、健康などなど。

その時に、問題が始まります。私たちは浅はかな計算をします。そして、様々な皮算用を始めるのです。そして、いつの間にか、主権者を自分へとしてしまうのです。計画することは良いのです。しかし、主なる神はどこかに行ってしまう、自力で人生を切り開こうともがくことになってしまうのです。「自分の日を正しく数える」ことの反対へと進んでしまいます。主イエスは言われます。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(33 節)ここに人生の主権は、主なる神にあることが示されるのです。そして、そこに立つ時に、自分の日を正しく数えることに進んでいくのです。

第三に、主イエスはもう一つのことを教えてください。主を第一にすることを教えていただいても、日々の歩みをするうちに、苦勞も絶えません。思い煩いも生じます。私もすっかり弱った全身の筋力が元に戻るだろうかと思ひ煩います。そんな私たちに、主は「あすの心配は無用です。明日のことは明日が心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」(34 節)と教えられました。私の場合であれば、思い煩う前に、今日できる適度の運動をする事が、自分の日を数えることに繋がるのでしょうか。

以上から、まとめますと、「自分の日を正しく数える」ということは、日々に靈的な恵みをいただくことを優先していくことです。他のことをする前に、主の前に出ることです。聖書を開く、祈る、賛美をするといったことを優先していく時に、「日は正しく数えられていく」のです。与えられた「日」が主の喜ばれるものとなっていくのです。語っている者も、病気のなかで、主に信頼し「自分の日を正しく数えることを教えて下さい」と祈りつつ、その日を始めていきます。そして、あなたとともに「私たちの日を正しく数えて」まいりましょう。主からの靈的恵みを味わい、数えていきましょう。